



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第4主日 C年 (2022年1月30日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書 1章4—5、17—19節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 12章31節—13章13節

福音朗読：ルカによる福音書 4章21—30節

## ことばに頼って生きる

三つの朗読から

第一朗読にある「主の言葉がわたしに臨んだ」(4節)に注目してください。「臨んだ」は原文では「ハーヤー」ですが、「有る」と訳されます。新改訳聖書第三版では「次のような【主】のことばが私にあった」となっています。しかし、この言葉には「生成する」、「生起する」、「作用する」、「有らしめる」という意味もあるそうです。そうしますと、ここでの主語は神のことばで、それが人間の力では抗えないものとして神さまからの働きかけが来たとして理解したらよいでしょう。あるいは、神のことばがそこに「あった」と考えてもよいでしょう。主なる神さまのことばが人に向けられます。それは音声であって、はかなく消えるもののようですが、実は人の心の中に入り、その人に使命を与えます。

第二朗読は有名な「愛の賛歌」の箇所です。「愛は忍耐強い」(4節)を心に留めましょう。神は忍耐強く愛します。その愛はエレミヤを選び出しました。パウロの回心を待ち続けた愛の神もまた忍耐強いです。神の忍耐強さを、身をもって体験したイエスさまでした。ですから、イエスさまはナザレの人々に忍耐強く丁寧に語りかけます。すべては愛の表れです。それに対して、ナザレの人々は石で打とうとして、崖から落とそうとします。

福音朗読では短い言葉、「ヨセフの子」(22節)を記憶してください。人々はイエスさまの言葉に驚きます。しかし、自分たちの既成概念でイエスさまを見つめています。イエスさまのせつかくの言葉は伝わりません。

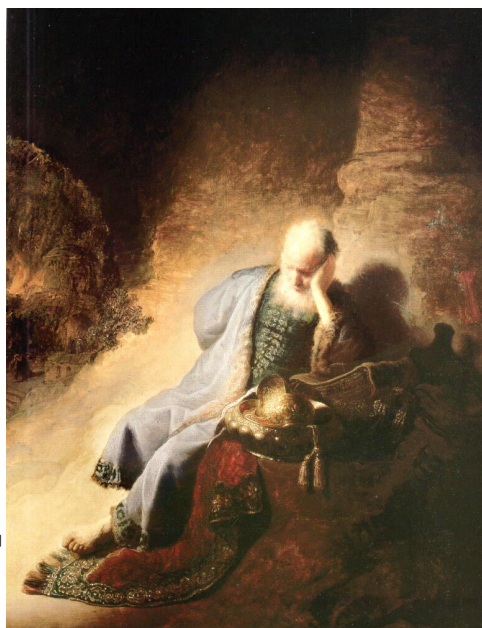
## 説教

文章を書いていて時々戸惑うことがいくつかあります。例えば、「私」と書くのがよいのか、それとも「わたし」と書くのがよいのか、どちらがよいのか分かりません。教会の文章では「わたし」となっているので、それに従っています。「体」、「身体」、「からだ」のどちらがよいのかも分かりません。一応、よほどでもない限り「からだ」と書くようにしています。「心」、「こころ」は「こころ」としています。どうやら、漢字よりひらがなのほうが好きです。手書きで書くと、ノートはひらがなばかりです。それはだいぶ漢字を忘れてきているからです。

「言葉」と「ことば」はどうでしょうか。もっかの悩みです。「ことば」と書くのが好きです。なぜなら、「言葉」は文字を指し、しかも文字の羅列の印象があるからです。しかし、「ことば」には文字ではなく、人の口から語られる数々のものも含まれるような気がしてならないからです。いや、人の口から語られるだけでなく、人がからだを使って表そうとするすべてが「ことば」には含まれているように思います。

聖書に基づく信仰は「ことば」の宗教だとわたしは考えます。それに対して日本の文化の中で生まれた信仰は「感覚」、あるいは「感じる」宗教ではないでしょうか。神は語りかけます。「ことば」で。それに人は耳を傾けます。こうして、神と人との間柄は「ことば」によって深まっていきます。

「主の言葉がわたしに臨ん」(エレ1章4節)で、エレミヤは預言者となります。はかなく消えてしまいそうな神さまからのことばだけが、エレミヤの頼りです。「わたしはあなたを聖別し諸国民の預言者として立てた」(5節)という神さまの決断に耳を傾け、それに応えるためにエレミヤは歩み始めます。



「悲嘆にくれる預言者エレミア」  
レンブラント 1630年  
アムステルダム国立美術館

ナザレの会堂に集い、イエスさまの救い主としての第一声を聞いた人びとは「皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚い」(ルカ4章22節)たとあります。イエスさまの「ことば」には力といのちがあったのです。イエスさまは「ことば」を通して、カファルナウムですでに病気の人、苦しむ人を癒しておられたのでしょ。癒しは「ことば」に頼るところから始まるのです。サレプタのやもめ(王上17章1-16節)も、シリア人ナアマン(王下5章1-19節)もそうでした。

しかし、イエスさまの故郷の人々は、イエスさまの「ことば」に驚きながらも、「ことば」に頼ることはありませんでした。「ことば」にいのちを見つけ出せなかったのです。

それどころか人々は「皆憤慨し」(ルカ4章28節)ます。憤慨の理由にはいくつかあるでしょう。「ヨセフの子」として自分たちと同じように育った仲間の一人であるイエスさまが、自分こそ「主の霊」がとどまり、神から油を注がれたメシアであり、聖書の預言を成就させ、最終的に民を解放する者であると宣言したからです。これは認めることができない不遜であり、許されない僭越ではないかという怒りです。しかも、そのように主張する「ヨセフの子」が、その主張を根拠づけるために自分たちが要求したしるしを拒否するのは、自分たちを軽蔑しきっている態度だ。その上、律法に忠実に歩むユダヤ教徒である自分たちを無視して、律法を知らない異邦人に救いが与えられるとするのは、聖なる神の律法を汚す発言だ。このような感情が爆発して、皆が総立ちになります。

人間でありながら自分を神のような立場に置く者、神の聖なる律法をないがしろにするような発言で律法を汚す者は、神を汚す者であり、そのような者はイスラエルの中から取り除くことが、イスラエルの民の義務とされていました。そして、その方法として石打ちの刑が定められていました。石打ちの刑は、犠牲者を崖や城壁のような高いところから突き落とし、その上に死ぬまで石を投げつけます。ナザレの会堂の人たちは、律法に対する熱心から、イエスを石打ちにしようとし、彼らは「イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうと」(29節)します。

かつて、イスラエルを巡礼したとき、人々がイエスさまを突き落とそうとした山の崖を訪ねたことがあります(跳躍の丘 Mount Precipice)。ナザレの町から、長い坂道を登った先にありました。



きつとここを、イエスさまは群衆ぐんしゅうと押し合いへし合いしながら崖いだけの頂つまで連れてこられたのだらうなと思うと、エルサレムでゴルゴダの丘のぼまで登すがたらされる姿れんそうが連想されました。

故郷ふるさとの人々の無理解むりかいに直面ちよくめんしながらも、それでもイエスさまは忍耐強く人々かかに関わろうとします。「愛は忍耐強い。愛は情け深い」(1コリ 13 章 4 節) のです。